

グローバル・カフェ「Yu Nishiyama さんによる公開授業&トークイベント」を ハイブリッド開催しました

2023年6月28日(水)、グローバル・カフェでは「Yu Nishiyama さんによる公開授業&トークイベント」をハイブリッド開催しました。

アメリカでジャズ作曲家としてご活躍されている西山由美さんより、公開授業「アメリカ文化におけるジャズ」(10:30-11:30)とトークイベント「アメリカで日本人女性作曲家として生きるとは」(12:10-12:50)を実施していただきました。

公開授業には学生8名(うちオンライン参加1名)、教職員5名(うちオンライン参加2名)の計13名、トークイベントには学生19名(うちオンライン参加7名)、教職員7名(うちオンライン参加2名)の計26名が参加しました。

西山さんは横浜市出身で、現在はアメリカ・ニュージャージー州に在住。洗足学園高校・音楽家ジャズコースを卒業後、アメリカ・テキサス州にある北テキサス大学(University of North Texas)へ音楽留学をされ、学士号を取得(Bachelor of Music Jazz Saxophone concentration)。その後、ニュージャージー州にあるウィリアム・パターソン大学(William Paterson University of New Jersey)にて修士号を取得。ジャズ作曲家として、作曲・編曲だけではなく、既存の楽曲をビッグバンド用に合わせてアレンジすることも多く、そのビッグバンド演奏者の数は70人と大編成になることもあるそうです。

公開授業では、西山さんよりジャズ音楽における3つの重要な要素「Swing」「Blues」「Improvisation」についてご説明いただきました。

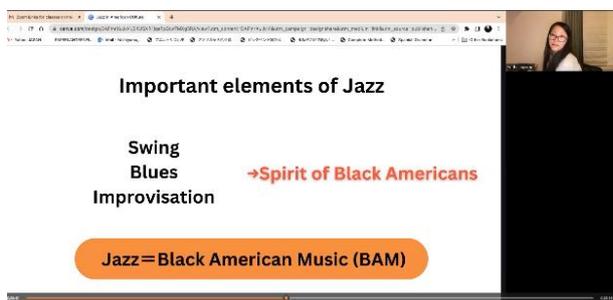
Swingは、拍子に特別なアクセントやリズムの強調を加えながら演奏することで、ジャズの特徴的なリズム感を作り出します。拍子を等間隔ではなくリズムカルにずらすことで、通常のリズムよりも軽快さをもたらし、聴衆が踊りだしたくなるようなリズムを生みます。

Bluesは、特有のメロディや音階を演奏することで、しばしば悲しみや暗い気持ちを表現するジャンルの音楽で、前述のSwingに乗せてBluesのメロディやフレーズを演奏することで、軽快さと哀愁が組み合わせられ、独特のジャズの響きが生まれます。



Improvisationは演奏者が即興演奏をすることを指し、あらかじめ決まっている構成や譜面に頼らず、その場で即興的にフレーズを創り出し演奏を行なうことで、クラシック音楽やポップ音楽では見られない要素であるとのこと。Improvisationによって個々の表現力が引き出され、観客とその場で生まれる音楽を共有できることがジャズの魅力の一つであるとお話していただきました。西山さんにピアノを演奏しながら解説していただいたことで、

ジャズへの理解がより一層深まりました。



さらに、この公開授業の最も重要なポイントとして、ジャズの起源を挙げられ、その起源はアフリカ系アメリカ人の文化や歴史が根底にあること、Swing、Bluesとも奴隷制度時代にアフリカ系アメリカ人が持ち込んだ伝統的な音楽であり、ジャズはブラックアメリカンミュージックの

一部であることを知ってもらいたいと強調されました。

最後に、ジャズがその長い歴史の中で、どのように変化していったかを紹介されました。ジャズ初期の時代には、人種差別の影響により黒人ミュージシャンがレコーディングスタジオに入ることが制限されており、黒人ミュージシャンの録音が一般的な録音として残されておらず、最も古いジャズの録音は白人ミュージシャン5人のパフォーマンス(1917年)であるそうです。時代によって使用する楽器が違っていたり、曲のテンポが早く即興演奏が強調されていたりすることなどを、映像を用いてお話いただきました。

トークイベント「アメリカで日本人女性作曲家として生きるとは」では、西山さんがアメリカでどのように音楽活動しているのかをご紹介いただきました。

新型コロナウイルス感染症の流行前は、自らお店のオーナーに直談判をし、ブリュワリー（ビールなど酒類の醸造所）やパブの片隅で、楽器を持参しバンド演奏などをしていたそうです。アメリカでは自分が演奏する機会は自分が作るというスタイルが基本で、街では様々なジャンルの音楽イベントを頻繁に見かけるそうです。



また、ジャズ音楽活動をしているメンバーの殆どが男性であることを挙げ、大学時代には60名ほどのクラスに女性は2名だけで、さらにアジア人の在籍者はごくわずかであったと述べられました。ニュージャージー州には「Jazz House Kids」という団体があり、若い世代、特に女の子にジャズに触れる機会を提供するための活動を行っています。西山さんは「Jazz House Kids」の中・高校生の子向けに開催されるサマーキャンプに指導者として参加しているそうです。

ちょうど新型コロナウイルス感染症の流行が始まったところ、ニューヨーク州ではアジア人に向けられたヘイトクライムが急増し、多くのアジア系の女性が標的にされました。西山さんは、ジャズ活動を通じて知り合ったアジア系の人々とともに“Justice for Asian Woman”というメッセージを発信するために、ニューヨーク州でパフォーマンスを行ったこともお話しいただきました。



質疑応答の時間では、「作曲のインスピレーションはどこからきているのか？」との問いに、西山さんは「怒り。苦しみから来ていることが多い。嫌なことを経験したら、部屋に閉じこもって、ピアノを弾きながら、作曲することが多い。」と述べられました。さらに、「さまざまな音楽活動をされていますが、どのようにして活動の場を広げているのですか？」との問いには、「コネクションが重要。だからアジア人女性は这个世界では生きづらい。前例

が少ない。学生時代の同級生や先生から声が掛かることが多い。またはジャズセッションというお互い知らない人たちが集まり、それぞれの技術を競い合う場がある。そこでどのくらい目立てるか。そこで目立つと連絡先を聞かれることもあり、縁が広がっていく。」と述べられました。



最後に「英語はどのように勉強しましたか？」と質問があり、「英語は本当に苦労した。中学英語は5段階中の2だったが、音楽留学を目指してからは1年間1日10時間くらい英語の勉強をした。日本にいたときは、単語帳を暗記して英語をたくさん読むという学習法をした。初めてアメリカに着いたときは、驚くほど相手が何を言っているのか全く分からなかったし、相手にも私が言っていることが何も通じなかった。今でも友人には「I'm from Japan」の「ジャパン」の発音が「ダパン」にしか聞こえなかった、とからかわれる。アメリカに着いてから、英語の発音を一から学びなおした。細かい英語の発音を何度も現地の友達に教えてもらった。日本にいるときから、発音法（フォニックス）をもっと勉強しておけば、もう少し流暢に話せるようになっていたのではないかと思う。英語は触れた時間だけ上達する。皆さんの夢を応援しています。」とエールを送っていただきました。

今回のイベントは7月4日（火）のタイイベント&留学報告イベント（チェンマイ大学編）です。タイから留学生として来日しているJoyさん、Wさん、Omaさんより自己紹介および自国の文化を紹介していただくとともにチェンマイ大学へ短期留学された荒川空さんと松浦圭真さんより現地での授業や生活などを紹介していただきます。